
ガンナー（笑）は神と踊る

猫世界

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガンナー（笑）は神と踊る

【Nコード】

N4485R

【作者名】

猫世界

【あらすじ】

異常に目つきの鋭い男は死んでしまった。そして神様に気に入られて第二の人生をもらったのだった。ただし、第二の人生は波乱万丈になることを彼は知らなかった・・・

プロローグ（前書き）

ほかにも連載があるのに勢いで描いてしまった
後悔しかしていない
でも反省はしない
だってそれが作者だもの

プロローグ

大事なのは見た目なんかじゃない、中身だ。

以前こんなフレーズを聞いた事あるが、俺はそうは思わない。

人間大事なのは見た目だ。

だってそうだろう？

たとえば、誰かと付き合うなら、脂ぎったデブなんて願い下げに決まっている。誰だってイケメンと付き合いたい願望はあるはずだ。

たとえば、会社の面接の時に目つきの悪い奴がいたら不採用にする。会社のイメージを損なうからという理由で。

たとえば、どれだけ社会に貢献しても評価されるのはいつだってイケメン、ブサメンはいなかったものにされる。皆見た目のいい奴が善行を積んだのだと信じたいからだ。

そんな『たとえば』はたくさんある。残念ながらどれだけ綺麗ごとをいっても見た目が悪ければ、それだけで罪なのだ。残酷な真理である。

物語のような展開に小説のような人間、そんなのは夢であり、現実ではありえない。いや、あつたとしても、人を見る目を持つ人なんてのは一部の人間しかいないし、逆に言えばその程度にしかない。一生お目にかかれない可能性だってある。そうして救われないまま一人寂しく死んでいくのだ。

おっと、こんなことを声高に叫ぶからといって勘違いしてもらっては困るが、別に俺の見た目はそんなに悪いわけじゃない。自己評価ではあるが、中の中くらい、つまり普通だ。どこにでもいる一般人だ。

もつとも世間の俺に対する評価は悪い。金髪に染めているわけでも耳に穴を開けてピアスを付けているわけでもない。煙草もしたことがないし、人を殴ったことだって無い。

じゃあ、何故そんなに悪いのか？

単に目つきが異様なほど悪いですが何か？

どのくらいかといえば、眠気で少し目を細めただけでヤの字の人が裸足で逃げ出すくらいに悪い。ちよつと待てといいたいが、それが現実だ。

まあ、そんなわけで俺は苦勞しているのである。目つきが悪いせいで誰も近寄ってこないし、友人なんていたような気がしない。むしろヤンキーの一人でも来てくれたら、俺は泣く自信がある。悲しいまでに孤独なのである。俺の目は凶器かなにかなのか。ガンとばすだけで銃を向けられたように人が脅える。そんな俺は一流のガンナ―（笑）。はは……笑えねえよ。

味方は両親だけである。

両親の容姿は至って普通である。まあ、年の割りには少し若いかなとは思うがそれだけ。目付きだって至って普通だ。突然変異か俺は？しかし、そんな俺に愛情を注いでくれたし、俺が一時期引きこもった時も見放さず面倒を見てくれた。思えば立ち直れたのはあの人達のおかげだ。だから、二人に感謝している俺は、お世辞にも頭がいいとはいえないまでも、恩返しをするべく必死に勉強し某一流大学

にギリギリとはいえ合格したのだ。ちゃんと社会に出て、一人前になり、二人に胸を張ってお礼を言いたかった。それが俺に出来る親孝行と思ったから。

———なのに

どうして死んでしまったのかねえ、俺はそこんとこどう思いますかね、神様とやら？

「すまぬ」

「すまぬじゃないよ、全く」

まあ、事情なんて簡単なもんだ。事故って死んだら、神様のミスだった。それだけの話。ネット小説でよくある話さ。

「それで、何か優遇処置とかしてくれるのか？」

「勿論。こちらの不手際だ。望みがあるならかなえてやろう、限度はあるがな」

道を歩いていたら、急に目の前が真っ暗になった。最後に何か影が見えたような気がするが、ぶっちゃけ驚く間もなく即死。痛みがなかったのは不幸中の幸いだったな。

で、この神様によると、死因は建築で使う鉄骨が雨あられのごとく降り注いだのだそう。そらあ死ぬわ。

ただ、そうなった大元の原因はこの後光で見えない神様が屁をこいた影響だという。なるほど、死ぬ直前に前触れもなく駆け抜けた突

風は神様の屁だったか。ありがたやあと祈ればいいのか、屁で死んでしまったと嘆けばいいのか。まあそのせいで鉄骨が落ちてきたのだから嘆くべきだろう。

確かに死んでしまったことに憤りはあるが、黙っていれば分からないことを、こうして責任を感じてわざわざ教えてくれる上に、何かをしてくれるというのだから、許せないが矛を収めることにする。神様なのにあたかだか人間一人のために願いをかなえてくれるというのだから、ありがたく受け取らせてもらおう。

「じゃあ、生き返らせて」

「無理だな。世界は既にお前を死亡したものと見なしている。いまここでお前を生き返らせれば矛盾が生じ、世界規模で異常が生じる。それはお前も本意ではないだろう？それに、よしんば生き返ったとしてもホラーだぞ？」

前半はピンとこないけど、動く怪奇現象になるのはごめんだ。そのまま二人に会いに行つて、両親に成仏してねなんていわれた暁には泣くな。

その願いは諦めるしかないな。だったら転生として生き返るのは・
・いや、それはもう俺であつて俺じゃないな。そうして両親に会つたとしても、俺は身分を隠さないといけなくなるし、他人として接せられるのは俺に耐えられるような気がしない。第一頭の中身を心配されるだろう。

だったら、俺が言うべきは・・

「あの二人を、俺の両親を幸せにしてください。あの二人のことだから、絶対悲しんでる。もしかしたら立ち直れないかもしれない。だから頼む」

俺は頭を下げた。

「・・・それでいいのか？」

「あの人達に迷惑をかけた分を全然返してないのに、こんなことになったんだ。親不孝にも程がある。あの二人の幸せは俺の幸せだ。この先あの二人が不幸になるようなことがあつたら、死んでも死に切れないっ！！」

「・・・いいだろう、その願いは聞き届けよう」

「・・・ありがとう」

俺を不可抗力とはいえ殺してしまったが、それでも二人が幸せにしてくれるのなら頭を下げなければいけない。それは果たせなかった俺の義務だから。

「最近のクソガキにしては中々いい奴だな、お前は。他の奴らは自分のことだけしか考えていないのが多いから、逆に珍しいぞ。特にお前は目付きが悪いのにな」

うるさい、神様が見た目で判断するな。てか、他にいるのかよ。逆光で顔は見えないが、ニマニマしているような気がする。なんとなくだが。

「よし、私はお前が気に入った。だから、お前には第二の人生を送らせてやる。サービスだ」

「はあ？」

何だか話に変な方向に飛んでいく。

「お前にはその『眼』があるとしても、それだけじゃ心もとないな・

・ふむ丁度良い。お前は私の屁を浴びたのだったな。そこに含まれていた微量の神気が付着している、それを元に能力を作るか。だったらあれがいいだろう。私の大好きな能力だ。お前も気に入るだろう。転生先は・・・よし、あそこがいい。最近ハマっているんだ。可愛い子には旅させろというしな」

「ちょ、ちょっと待て、状況が全然分からない！？てか、屁に神気つてお前の屁はどんだけ凄いわけ！？それと不穏な発言やめてくれない！？」

「全て私に任せておけ！くく、さあ腕がなるなあ！」

そうしてもものすごい速さで手を動かして何かを操作しだす。それにしても、何かノリノリじゃないかこの神！？

「じゃあ、いつて来い！！」

神様が思いつきり腕を振り下ろし、ボタンのようなものを押す。まさか、お約束の落とし穴か！？

しかし、落とし穴は発動しなかった。

「は？」

いや、穴は現れたよ。頭上に。

「意表をついてこそその神だ。第二の人生楽しんでくるといい」
「うおおおおおおお——！！？」

そして、俺はぞるっと吸い込まれたのだった。

変わらぬ目つきに請いしてる、頼むから普通の目を・・・（前書き）

連続投下

変わらぬ目つきに請いしてる、頼むから普通の目を・・・

一体どんな世界に送られるのかと思ったら、案外普通で驚いたのは今でもよく覚えている。

あの時神様の口からは不穏なワードが迸っていたから、覚悟していたのだが、俺が生まれたのは前世とほとんど変わらないところだった。てか東京だった。きつとあの時の言葉は神様の冗談だったのだろう。

今では俺も立派な六歳児、小学校に無事入学しました。

色々あった。精神的な意味で。

それで察してくれたまへ。

まあ別に俺の人格を揺るがすような事件は起きていないとだけ言うておこうか。

傍から見れば世間一般のごくありふれた光景だったろうしさ。

さて、俺の名前は前世とは違った。当然だ、両親が違つものだから。容姿だって違う。日本人ではあるけど。

田中太郎

よくテストの記入例で名前欄に記載される名前。

平凡すぎてむしろない名前。

嘘みたいだろ？これが今の俺の名前なんだぜ？

いや、今の両親も理由なくこんな名前を付けたわけじゃないらしいんだ。

『太く朗らかに生きる』

それが名前の理由。だから普通は『郎』の字を使うのに『朗』の字を使っているだろ？

ちなみに父さんが考えた。母さんには不評だったけど。でも母さんの『光宙^{ひかりちゆう}』とか『大空^{だいあ}』とかは嫌だったからこれでよかったんだと思う。

太郎、いい名前じゃないか。

前世では若干根暗気味だったので、今生では両親の願い通りに生きてみたいと思う。

たとえ目つきが悪かろうと！！

・・・・・・・・・・

そうなんだよ。実は何故か今回も目つきが悪いんだよ。

もうね、なんなのこれって愚痴りたくなるくらい悪いんだ。

前世ではこれのおかげで苦労したのに、また苦労しないといけないのかぁ！と。

神様、どうしてこれを残したまま俺を転生させたんだよ……。

勿論両親は普通。

おかげで幼稚園では怖がられて友達でできなかったよ……。

目の前で何度も泣かれる俺の気持ちになってくれよ……。

先生も先生でどうして涙目なんだ、そんなに怖いのか？そんなに怖いのか？

泣きたいのはこっちだよ、ちくしょう……。

はぁ……。

まあ、元の世界と基本的に同じだし、生活が楽といえば楽なのでそこは良かった。今の両親とも仲良くやっているし、極々普通に日々を生活できるのは良い事だ。前の両親には迷惑かけるだけかけて親孝行できなかった分、今の両親は大切にしていきたい。

だから今から勉学に励んでいくつもりだ。そうすれば日本の大学に入ることも夢ではないし、社会に出たとき優位に働く。学歴社会美味しいです。そして将来は公務員になる。安定しているし、何より親に胸を張って誇れる職業だと思うから。

でも、まずは前世ではいなかった友達の一人は作りたいなあと思う。友達百人とまでは高望みしないからせめて一人だけでも。

「そうして一人も出来ないまま夏休みが訪れるのでした、チャンちゃん・・・」

「げ、元気を出してタロちゃん、今日のお夕飯はタロちゃんの大好きなハンバーグよ？」

「大丈夫だタロ、いつかきつとお前のことを分かってくれる子が現れるさあ！」

「・・・ふふふ、いつかっていつさ？」

俺が悪いのか？そうだよなあ、見た目って大事だよなあ。第一印象って大事だよなあ。そんなのは前世で嫌ってほど身に染みてたのになあ・・・。

「そうだわ！タロちゃんにビッグニュースがあるのよ！これを聞い

て元気になつて頂戴！」

「おお、母さん、アレを発表するんだね！」

「ええ、あなた！タロちゃん聞いて！実は、今日から夏休みということ……」

母さんはじらすように言葉をとめて、父さんと息を合わせて宣言した。

「家族みんなで旅行にいきますーすー！」

「へえ……」

「む、反応が薄いなタロ。いいか、旅行と言ってもただの旅行じゃないぞ！昔お世話になった人とお孫さんと一緒に行くんだ！」

「そのお孫さんがタロちゃんと一緒くらいの年齢らしいのよ！」

「友達になれるチャンスじゃないか！」

「それに外国に行くから気分転換にもなるわ！」

「「いい事尽くめじゃない（か）！」」

「……そうだね、うん！いつまで家でうじうじしてても友達なんて出来ない！！行動しないと何も始まらないんだ！父さん、母さん、俺行くよー！」

「そのいきよー！」

「じゃあ、早速準備しよう。なんてったって今からだからね」

今！？めちゃくちゃ急な話じゃないか！！

「実は僕達の仕度は終わってるんだよね。タロの分も学校に行つての間終わらせたから大丈夫だよ」

「ちょ、どうして早く教えてくれなかったのさ！？」

「うふふ、ちゃんとビックリしてくれたみたいね。タロちゃんてば鋭いからコソコソ準備するのは大変だったのよ？」

「タロは変にませてるからあまり手が掛からない反面、どうも寂し

いんだよね。子供だからもつと頼ってもいいんだけど、あまり相談もしてくれないし。さっきもあそこまで追い詰められてるなんて思わなかったし」

「だから、これは私達の意趣返し。これに懲りたらもつと私達を頼りなさい」

どうやら、二人にしてやられたようだ。こうなると笑しか出てこない。

何か気分が楽になった。思えば前世での親もこうやって俺を元気付けてくれたな・・・って比べるのは二人に失礼か。

「俺、二人の子供でよかったよ」

「嬉しいこと行ってくれるじゃないか」

「私なんか不覚にも涙腺が緩んじやったわよ？」

二人は暖かい笑みを浮かべて俺を抱きしめてくれた。心地のいい暖かさに、俺は視界がぼやけた。だって・・・いや、そんなのはいうだけ野暮ってもんだ。そうだろう？

「つて、ぎゃあああ！！早く行かないと集合時間に遅れるかも！！二人とも早く車に乗って！！」

「本当だわ！！タロちゃん、早く乗って！え、えつとパスポートに財布にチケットが・・・ないわ！？ああ、二回の寝室におきっぱだった！！ちよつと取ってくる！」

「いや、僕が取ってくる！」

「私が」

「僕が」

「いや、俺が！！」

「「どうぞどうぞ」

ゴタゴタで最後は締まらない結果になったが、家族の絆は深まったんじゃないかなと思う。でも、俺の『二人の子供でよかった』宣言は少なくとも六歳児で言う言葉じゃないような？

「ごめん、やっぱり鞆に入ってたわ」

とりあえず、一言。

階段上りきった後に言うなし。

邂逅（前書き）

後半のよみにくさは異常
注意してください。
ではどうぞ

邂逅

あれから急いでなんとか集合時間の前に空港に着いた。

そのせいで精神的に疲れたが、どうも相手を待たせるような真似はしたくなかったみたい。

俺はというと、二人にこれから会う人の人物像を聞いて楽しみにしていた。

ものすごい人格者らしい。

詳しくは話してくれなかったが、昔大層お世話になったらしく、俺の名前もその人から一文字貰ったのだという。

そんな人だったら俺も仲良くなれるかな。

もう御爺さんと呼んでも差し支えない方らしいけど、俺の目をみて心臓止まらないかと心配にもなった。

期待半分、不安半分。

そして、約束の時間にそれらしき人が現れた。

「君が二人のお子さんだね。聞いていたとおり凛々しい目つきじゃないか。おっと、自己紹介がまだだったね。僕は草薙一朗っていうんだ、よろしくね」

うあつ、眩しい!?

なんだ、この穏やかな笑みはっ・・・!?

ガンナー（ガン飛ばしのプロの意）の俺と視線を合わせるだけでも偉業だというのに、この人はその先を行っていた。

むしろ凛々しい目とお世辞まで言ってくれるこの人は菩薩ではないのか！

あまりの眩しさにこっちが逆に目を逸らしてしまったよ！！

いや、大げさだし失礼だと思うかもしれないが、俺にとっては戸惑うことなのだ。

この自分でも時々びびる極悪の目を見て、笑いかけられたのは俺の経験上ほとんどない。

しかも数少ないそれも引きつったものだった。

なのに、この人の笑みはあくまで自然体。

どうすればいいのかわからなくなったのだ。

「おや、びつくりさせちゃったかな？」

「あはは、大丈夫ですよ。照れているだけです」

だというのに、この人、いやこのお方の目はそんな俺の態度を微笑ましいものを見るそれだった。

くう、凄まじい威力だ・・・。

俺の心境を例えるなら『連邦のモビルスーツは化け物か』ってなもんだ。

いや、冗談抜きで。

「ほら、護堂も挨拶しなさい」

「くさなぎごとうですっ、よろしくおねがいします！」

一朗さんばかりに目が向っていたせいか、その傍にいた男の子には気付いていなかった。

まだ三、四歳と俺よりも年下の子っぽい。

元気よく自己紹介をしたが、俺をみて少し涙目になっているのは可愛嬌だろう。

ていうか、普段は泣かれるし。

これだけ出来ればむしろ上出来て言うのは上から目線だろうか？

でも凄いと思うのは俺の偽りのない本心だ。

・・・母さんたちの言うとおり仲良くできるかな？

「ほら、タロちゃん、あなたもよ」

背中を軽く押されて、正気に戻った。

ちよつといつもの常識とはあまりにもかけ離れた事態が続いたせいで、意識が跳んでいたみたい。

しかし、これは仲良くなる絶好のチャンスだ。

今の今までうまくいったためしがなかった自己紹介。

ここでうまくいけば、今後もうまくいくに決まってる。

いわばここが分岐点にして第一歩！

初めて会う人と良好な関係を築くためにはまず第一印象が大事だ。

だが、俺の場合、圧倒的欠陥がそれを著しく貶める。

それを払拭するには明るい笑顔と爽やかな自己紹介が必要だ。

俺は初めてまともに対応されたことで、有頂天になっていた。

この流れなら出来る！と

今までこう自己紹介しようと考え続けてきて、頭の片隅に刻まれているもの。

それを言えば、仲良くなれること間違いなし！

頑張れ俺、俺なら出来る、気合だガッツだ根性だ！！

ファイトオ、オーッ！！

自分で自分勇気付けながら、いざ口を開こうとした時不幸は訪れた。

何を言えいいんだっけ・・・？

どうやら、あまりにも使われなかったせいで、『僕の考えた仲良くなるための自己紹介文』は頭の片隅どころか、埃を被ったままだこ
か分からない場所にしまわれいたようだった。

あれ？

あれれ？？

あれええええええええええええええええ！？

土壇場で対人関係における経験不足が災いしやがった！

あ、ああ、どうしよう、なんていえばいいの。

下手に考えていたせいで、頭が柔軟に働かない。

学校でするような感じでいいの！？

礼儀に反しない！？

てか自己紹介ってなんだっけ！？

頭の中がよく分からない焦りで一杯になった。

だが、あまり待たせたら、俺はあまり社交的ではないと思われる。
両親が心配そうにこちらを見ていた。

このままでは

し、仕方がない、せめて名前だけでも！！

「田中太郎」

自分でもビックリするくらい平坦な声が出た。

違っただろ俺！？

名前だけでも明るく言うとのそうでないのだと全然印象代わるって分かってただろ！？

ちくしょおおおおお、どうして初対面とかあまりなれていない人相手だとこんなに無愛想で口が動かなくなるんだあああああ
あああああああ！

しかも混乱がそれを後押ししやがった。

沈黙が痛い。

やっちまったか？

護堂くんの目にまた涙が溜まりだす。

考えるまでもなかったね。

やっちまったか？じゃねえよおい！と自分で自分に突っ込む。

明らかに言葉足らずじゃねえかよ。

他に何か一言あった方がいいに決まってるだろうが。

でも何をいえばいいか分からない。

・・・え、笑顔だ。

とにかく笑顔で全てを誤魔化そう！！

俺は自分に出来るとびっきりの笑顔を浮かべた。

「ひいう！？」

思いつきり引かれました。

護堂くんが一朗さんの後ろに隠れてしまった。

ああ、これは取り返しがつかない・・・。

「あはは、どうやら少し緊張しているみたいだね」

「もう、この子は本当に。ごめんなさい、さっきまで堂々としてたんですけど、何だか萎縮しているみたいで」

「いや、いいだよ。一緒にいればその内打ち解けるだろうしね」

一朗さん、あんた菩薩ではないかって疑ってたけど失礼だったわ。
あんたが菩薩だったんだね。
後光であんたの顔がみえないよ、神様みたいに。

S i d e 護堂

こんにちは、くさなぎごとうだよ。

じいちゃんにつれられてきょうからりょこう。

じいちゃんのもだちにさそわれたんだって。

でもぼくのおかあさんともうとのしずかはおるすばんなのでざんねん。

いっしょにこれたらよかったのにね。

でもぼくとおなじくらいのが、いっしょにくるんだって。
なかよくなれたらいいな。

そうおもっていたこともありました。

くうこうであつたそのこは、とてもこわかった。

なにがこわいのかというと、そのこのめがこわい。

ちよつとまえにみたごみをあさっていたいぬよりも、もっとするどくて、ぶつそうなんだ。

もつといえは、たまにいえにくる、きずがたくさんあつて、せなかにおおきなえがあるじいちゃんのもだちよりも、めがこわいんだ。
あれはぜったいわるものめだよ。

「僕は草薙一朗っていうんだ。よろしくね」

じいちゃん、そいつにちかづいちゃだめ！

そつおもつても、じいちゃんはてをさしだしてしまった。
あぶないっ。

しかし、なにもおこらなかった。

ていうか、そのこはそのてをにぎらなかったんだ。

そのうえ、きょうみなさそつにどつかべつのところをみてた。
やっぱりこのこはわるいこだ。

ここはぼくががつんといってやらなきゃ！

でも、たいみんぐよくじいちゃんにこえをかけられてできなかった
よ。

しかたないね。

ぼくもじこしょうかいした。

「くさなぎごとうですっ。よろしくおねがいしますっ」

そのこがぼくをみた。

そのめでみられたら、すぐくふあんになった。

こ、こわい！

こわくて、なきたくなつた。

でも、ないたらだめだつておもったから、がんまんしたよ。

じつとこつちをみつめてきた。

ぼくもみかえしてやつた。

まけてやるもんか！！

おまえなんかこわくないぞ！！

そんなきもちでにらんだ。

すると、あいてがいつばまえへでてきた。
やるのかっ！

でも、ただなまえをいっただけだった。

「たなかたろう」

なんでいきなり？とおもったけど、そういえばなまえをしらないこと
にきづいた。

このたいみんぐでいうってことは、もしかして、みとめられたのか
な？

ほら、よくあるせいしゅんのはなしみたいな。

おとこはこぶしでおたがいをしるんだって。

こういうおはなしをかあさんがたくさんはなしてくれたんだ。
よくわからないけど、いまはなんとなくそんなふいんきだし。
なぐりあってないけど。

そのときはそうおもったんだ。
でもちがった。

ほんとうのこわさはここからだったんだ。

二タア・・・

からだがかつてにふるえた。
むねがいたい。

なさけないこえをだしちゃった。

こわい、こわい、こわい。

あのめがこわい。

あのかおがこわい。

あのこがこわい。

あれはかあさんのこわいはなしのなんばいもこわい。

あれはよるのくらいへやのなんばいもこわい

あれはおばけのなんばいもこわい

どうしようもなくこわくなって、きがつけば、ぼくはじいちゃんのうちろにかくれていた。

じいちゃんのずぼんをつかんで、なさけないけど、がたがたふるえていた。

でもじいちゃんはちがった。

じいちゃんはいつもおなじようにのほほんとしていた。

なぜか、わらっているじいちゃんがすぐくおおきくみえた。

さすがじいちゃん、すげえ！

それを見たら、なんかこわさがすくなくなった。

そうになったら、げんきもでてきた。

だからもういちどあのこ、たろうをにらむ。

つ、つぎはぜったいにかつからな！！

邂逅（後書き）

後半ででてくるふいんきは誤字にあらず。
念のため言っておきます。

護堂はまだ子供なのでこういう感じになりましたが、
雰囲気は出てるでしょうか？
なにかアドバイスがあればお願いします。

人間誰しもが持つ根源的な恐怖（前書き）

ようやく更新が出来た・・・

ここまで遅くなってしまう申し訳ないです。

リアルが尋常じゃないくらい忙しくかったのです。

忙しい合間に更新しているので、また遅くなりますが
他の作品を含めて完結させていくつもりなので

どうぞよろしく願います。

・・・クオリティは保障しませんが。

人間誰しもが持つ根源的な恐怖

人間誰しも本能的、あるいは生理的に苦手なものというものがあるはずだ。

俺の場合それは至極一般的なものである

そして、それ故に、俺は不幸に見舞われることになってしまった。

ああ、憎きはあの鉄の塊であることよ……。

今回の旅行は海外という海を隔てた先にある地だ。

海の間こうにあるわけだから、当然、海を渡らなければならない。

そうすると、手段は次の二つになる。

空を飛ぶか船で進むか。

今回俺達が取ったのは、空を飛ぶ……すなわち飛行機に乗るわけなのだが、初めての海外旅行ともあつて浮かれていた俺は、不幸にもあることを思い出してしまった。

人間誰しも少なからずある（と信じている）症状。

すなわち、高所恐怖症

つまりは高いところが苦手。

旅行のテンションも一気にガタ落ちし、顔面蒼白になる俺。

怖い。

それが搭乗時間になって呟いた言葉だった。

誰にも聞かれることなかった言葉は、俺の足を竦ませるには十分だった。

どうして忘れていたし。

俺は自分のうかつさを呪いたくなった。

飛行機。

人間が作り出した知恵の一つ。

鳥のように羽ばたかないくせに、どういう原理か空を飛ぶ乗り物。

そもそも人間は地力で空を飛ぶことなど出来ない生き物だ。

それは鳥や虫などに与えられた特権であり、地を這う生物である人間はどうして逆らうのであろうか？

たとえ何かあっても、逃げ場なんか何処にもない空。

もしハイジャックとか墜落の危機に巻き込まれたりでもしたら命が容易く散ってしまう。

ああ、そんな動く処刑台みたいな乗り物に乗るはめになるなんて・・・。

しかし、今更だ。

今更なにをしたところで俺が飛行機に乗ることは既に決定事項である。

事前に海外へ旅行すると分かっていたれば、まだ何とかしようもあったかもしれないが、今回は両親のサプライズ。それが仇となってしまった。

まさか、二人はこれを見越したのか・・・？

そつえば、二人の顔がまるで某新世界の神の如く歪んでいるような気が・・・。

き、気のせいだよな・・・？

妙な汗が流れるのを不快に感じつつ、二人の顔を今一度よく見てみる。

そこには――

「どうしたの、タロちゃん？早くしないと置いていっちゃうわよ」

「なんだトイレにでも行きたいのか？」

「う、ううん。大丈夫、ちよつと身体を伸ばしてただけ」

二人のいつも以上に輝いている笑みは、修学旅行で期待感を隠せない学生のそれであつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・全く、

俺としたことが。

恐いからといって、疑心暗鬼に陥るのはみつともないったらありやしない。

二人は、これでもかというくらい全身がウズウズしていて、彼らからそんな意図は見当たらない。

正直、乗りたくないのが俺の本心だ。

だが、乗らないと外国へは行けない。

それは旅行が根本から台無しになるというのと同義。

心底楽しみにしている両親を見てしまった俺としては俺如きの恐怖で水を差したくない。

仮に一言怖いといえは優しい二人ならば、まるで灰色宇宙人のごとく手をそれぞれ握ってくれるのだろぅが、精神年齢とはいえ、いい大人がそんな情けない姿を公衆の面前に晒すのはちよつと気が引ける。

どの道ここで乗らないなんて選択肢なんてないんだ。なに、乗ってすぐ寝れば怖くない！大丈夫だ、問題ないことないことない。きつ

と、多分、おそらく。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

「やっぱトイレ行ってくる」

「おゝ、まだ時間があるから急がなくてもいいからな」

うん、乗り物に乗る前にはトイレ行つといたほうがいいね。それに、いきなり乗るにはまだMPが足りていないというかそんな感じであんまり笑いたきゃ笑えよ。

しかし、ああいった手前トイレには向っているが、別に大も小も出すつもりは微塵も無かった。その目的は一つ。

「覚悟しろ」

それは誰に言つたわけでもない、自分に向けた言葉だ。

覚悟・・・飛行機に乗る覚悟をしなければならない。

飛行機に対する俺の苦手意識はちよつとやそつとじゃなくなるなら、まして今すぐになんて不可能だ。

その上で飛行機に乗るのなら、俺は腹をくくらなければならない。

そう、それこそ最初から飛行機が落ちてもいいという覚悟で・・・。

心よ奮えよ。

恐怖を押しつぶせ。

両親のために己を捨てろ。

心の中で何度も何度も念じ、足を動かしたのだった。

ちなみに、何故わざわざ離れてやるのかといえば、単に恥かしいからだ。

「・・・まさか、こんなに早く嗅ぎ付かれるとはな」

だが、俺の足は目の前に立ちふさがった男によって止まってしまった。なに、この人？

どうやら同じ日本人のようで、仕立てのよさそうなスーツを着こなしていた。見た感じ、大体二十歳後半くらいだろうか。

「その目は・・・なるほどただの子供と考えるにはいささか無理がありそうだ」

はい来ましたTHE・勘違い。

俺はただの一般人です。子供です。そんな警戒した目で見なくても大丈夫です。

だから、どつかいってください。

むしろ俺がいくからそこだけ。

しかし、俺の訴えかけるような視線に気付かず、スーツの男はそのまま続ける。

「正史編纂委員会の手の者といったところか」

「・・・違う」

何だ、その何たら委員会とやらは。

PTAの亜種か？

「ではフリーランスの魔術師なのか？君ほどの者が？望めばどんな組織にも入れそうなものだが」

・・・魔術師？え、何それイタイ。

ブッ、魔術師って、組織って！！真顔でそんな香ばしい単語聞いたら不思議と笑えてしまう。

どうやら、この人は大人のように見えて、頭はまだ青春のまっただかにあるようだ。

そこで思い至ってしまった。

今はまだないだろうが、もし将来頭から青春が抜けきった時、この人は大丈夫だろうか？

この只今絶賛生暖かい目集中セールが展開されている男が、この時の事を思い出したとき、果たして耐えられるだろうか？前世で俺にも覚えがあるだけに、余計に心配になった。

俺は人をあまり差別しない男だと自負している。何故ならこんな目をしている自分が、差別される側の人間だからだ。その苦しみを他の奴らよりも知っているつもりだ。もし、将来そのような事態に陥り、味方の一人もいなくなったりしたら、下手すればこの人は自殺してしまうかも。何故ならその反動は自分の行ってきた行動に比例するのだから。

昔中学校のクラスメートがある日左腕に包帯を巻いてきたときのことを思い出してしまった。口調までも変えてみんなにイタイ奴と認識されてしまった哀れな彼。その後の彼の姿を見た人はいない。背負ってしまった歴史の重さに耐え切れなくなったのだろうか。

妄想だけなら軽傷だ。

だが、実際に行動に移してしまったら致命傷となる。

そいつを見て実感した事柄だ。

あの時は、俺も荒れていたいたのでそっちの方に気を回す余裕なんて無かった。

しかし今は。

再び同じ人種と出会ってしまった今は違う。

俺は、せめて俺だけでも思い口を開いた。近い将来、心も大人になり昔のことを思い出した時、俺みたいな子供でも味方がいると覚

えてもらいたいがために。

「お前の味方」

途端に目を見開く男。今はまだどういう意味が分からないかもしれない。もしかしたら、彼らの世界観で今の言葉を捉えてしまうかもしれない。

それでも俺は言わずにはいられなかった。

「君は一体・・・」

「一般人。それ以上でもそれ以下でもない」

即座に返した。

そこは譲れない一歩だ。

流石の理解ある俺も彼らの世界観に巻き込まれたくはない。ただでさえ目のせいで評判が悪いのに、この上イタイ奴認定されたくない。

俺の想いが通じたのか、相手は考える素振りをした後こういった。

「・・・なるほど、そういうことか。すまなかったな、少年」

そういつて、男は去っていった。

ふう、良かった。何事もなくて。

無理に巻き込まないところが大人だったな。

そこが子供とは違う。

クラスメートだった奴は、俺を『魔王』と呼んで世界観に引きずり込もうとしていたからな。

さて、意外なところで時間を食ってしまったが早くトイレで覚悟を・
・

「おい、タロ〜そろそろ乗るよ〜」

マイガッ！

人間誰しもが持つ根源的な恐怖 裏 *グロ注意(前書き)

ようやく、投稿。

あまり出来はよくないから、期待はしないで
と予防線を張っておく。

それと、グロ注意。

ではどうぞ。

人間誰しもが持つ根源的な恐怖 裏 *グロ注意

S i d e ???

その部屋は死臭で溢れかえっていた。

それもそうだろう。

そこには、凄惨な光景が広がっているのだから。

床一面を覆いつくすほどの死体。

前後左右どこを見渡しても死体が溢れていた。

そして、その全てが異様なまでに、異常なまでに体が捻れていた。

手が捻れていた。

腕が捻れていた。

足が捻れていた。

背骨が、首が、頭が、内臓が、果ては神経や血管にいたるまで、ありとあらゆる箇所が捻れていた。逆に捻れていない場所などないかのように。細胞の一つ一つがねじれているかのように！！

当然、もはや人の形などしておらず、醜悪なオブジェとなっていた。部屋全体が血で真っ赤に染まり、猟奇現場真っ青な空間へと変貌を遂げていた。

凄惨なんて言葉で済むものではない。どのような方法を用いれば、このようなことが可能なのか。普通の人がこの現場を目撃すれば、そう言うだろう。

自分でやっておきながら、他人事のように判然とそんなことを思っている、部屋の扉が音をたてて開いた。入ってきたのは若い男だった。何かいいことでもあったのか、鼻歌を歌いながら上機嫌で部屋に入った。

いつもと同じ光景が広がっていると想像していたら、その瞬間に凍りついた。

「え？」

視界一杯に広がる惨劇、空間に溢れかえる死臭。部下たちのあまりにも現実離れしている変貌に、呆然と膝を着いた。常軌を逸した光景に、頭が情報を処理し切れないようだった。

何とか立ち上がろうと地面や壁に手をつけて頑張っていたが、まるで生まれたての鹿のようにプルプル震えているのが、場の空気にそぐわない。滑稽なだけだ。そして、ふと手が赤く染まっていることに気づき、現実を認識して、胃の中のものを吐き出す。

「ば、馬鹿な！！俺は、夢でも見ているのかっ……………！？一体、何がどうなって……………」

まあ、神秘のしの字も知らない一般人だったら、そうなる。しかし、私にとってはどうでもいいことだ。目の前に目的の人物が現れた今となっては特に、ね。背中を壁について、気配を消して立っていた私は、錯乱している男に声をかけた。

「桂木志郎だな」

「だ、誰だっ！？」

「ふむ、こういう仕事上様々な人間を見てきたのだが、君たちは決まってその台詞を言うね？そして、常々私は思うのだよ。そんなことはどうでもいいと。大事なのは、今君が立たされている状況さ」
「く、黒いコートと帽子……………、まさか『死導者』っ！？」

その男に命を狙われたら最後、導かれるように死ぬ。それ故に二つ

名は『死導者』

初めてその噂を耳にした時、私はあまりの羞恥心に飛び降りようかと思った。まさか、それが狙いではないかと邪推してしまうほどに、ていうか、残念なことに、この噂を広める連中は、至って真剣である。本当に残念である。

おかげで私の知名度が上がり、依頼も増えたのは素直に嬉しい。が、それでも、その名で呼ばないでほしいし、そんな風に噂しないで欲しい。何ともいえない香しい匂いがするので。それとも、黒のトレンチコートと紳士帽というセットが、そんな匂いを発しているのだろうか？

それはさておき。

「私のことを知っているのなら、今がどういう状況か分かっただろう？」

別に知らなくても分かるだろうかと続け、私は男を見据えた。男は青を通り越して真っ白になっていた。こちらが気の毒になるくらいに。今まで私が行ってきた仕事の惨状を思い出したのだろう。可愛そうに。……私が言うことではないな。

「ま、まで、とっ、取引をしよう！貴様に支払われる報酬がいくらか知らんが、その倍は払う！！だから見逃してくれ！！」

「却下だ。そんなことをすれば、今後の信用問題に関わる」

よくある命乞いの仕方だが、論外だ。今後この仕事を続けるつもりでいるので、こっちからすれば、『金次第で裏切る』と広がるのは避けたい。なので、微塵も揺るがずに即却下。

「ちなみに、他のもので釣ろうとしても意味ないぞ。私が自分に課したルールの一つに『一度受けたら、撤回しない』というのがある。依頼はやりきるのさ。さて、命乞いはもういいか？」

「ひっ」

軽く視線に殺気を込めただけで、相手は息を呑み、竦みあがってしまった。

それを見たら、少し遊びたくなった。別に鰯る積もりは一切無いが。

「・・・君は次に『俺には五歳になる娘がいるんだ！』という」

「まってくれ、お、俺には五歳になる娘がい・・・え?!」

私の言葉通り、男は言いかけて気付いた。そして、驚愕に目を見開き、パクパクと金魚のように口を動かす。どうして？と疑問が瞳に浮かんでいた。答える代わりに、私はニヤニヤ意地悪い笑みを浮かべた。

別に読心術とかを使っただけではない。稀に、霊視が非常に強力な者は、自然とそういうことが起こると言う。勿論、私は違う。むしろ、術者としては落ちこぼれた。

それでも私は殺し屋として、それなりの人数を始末してきた。そして、大抵のやつらは似たようなことを口にだす。こちらの良心に訴えかけるように。そこから判断し、それを口にしたら当たっていた、それだけのこと。

それにしても、こういう時決まってこいつらは『五歳の娘』というのが不思議だ。キリがいいからだろうか？・・・・まあ、そんなことはどうでもいい。

少し悪趣味だったかもしれないが、構わない。たまにはな。

私も人間なので、息抜きというのは必要だ。

その相手がたまたま今回のターゲットだったというだけの話。

「その常套句は聞き飽きたよ。いや、仮に本当だとしても、私が見逃すとしても？ はは、冗談を。だって、君がやったことを考えれば、分かるだろう？」

「う．．．．．あつ．．．．．」

そもそも、君を殺したいのは私ではなく、依頼主。私はただの代行者に過ぎない。

こちらに微塵も見逃す気が無いのを見るや否や、男は呼吸困難に陥ってしまった。人は、極度の緊張状態に陥ると、しばしば心肺機能に支障をきたすという。

「い、嫌だ．．．．．まだ．．．まだ死にたつ．．．．．死にたくない．．．．．」

「君に殺された人たちもそうだっただろうよ」

息も絶え絶えに、壊れた人形のごとく同じことをブツブツ呟いて失禁している姿は、傍から見なくても、見苦しいだけだ。さつさと楽にしてあげよう。私は右手の中指と親指を合わせる。

「痛いのは一瞬だけさ．．．．．おそらくだが」

自分で受けたことがないのだから分かるはずもない。ましてや、他人の痛覚など私が知るはずもない。締まらない台詞を吐き出し、パチンツ、と指を鳴らす。

瞬間。

「ゴペツガア．．．．．」

男はミチミチと歪な音をたて、擦れていく。そのたびに、血飛沫が飛ぶ。

それは、まるで雑巾が絞られているようだった。グロイ。

数十秒後、部下と同じ末路を遂げた男は、もはや他とは区別がつかなかったほど、その原型を残していなかった。唯一の判断材料はその着ている服装が、他と比べて高級感漂うものであったことくらいだろう。

「悪く思わないでくれ。こちらでも仕事なんですね」

そんな理不尽なことを、既に物言わぬ屍に投げかけた。

「さて、これにて依頼は完遂。さつさと報酬貰って帰るか」

最後に生き残りがいないかを確認して、暗殺した証拠を持ち出して、部屋を後にするのだった。後は、報告書を書いて、指定した口座に依頼の報酬が入れば仕事は終わり。

その後しばらくは、ゆっくりするでしょう。

がそうは問屋がおろさない。

あれから一ヶ月が経った。この一ヶ月、慌しかった。

私の引き起こした事件が世間を賑わしていたり、この件の依頼主が依頼料を渋ってきたり、依頼主を脅は……抗議に行こうと思ったら、どこからか嗅ぎつけてきた正史編纂委員会のエージェ

ントに住処をガサ入れされたりと、それほどゆっくり出来なかった。あの胡散臭いリアル忍者が、次あったら覚えている。そんな負け犬根性丸出しで逃げ切った。所詮、術士としては落ちこぼれの私など、その程度のものだ。

そして、ようやく一息ついたところで、新しい依頼が来た。

休む暇が犠牲になったことで、ため息を吐きたい気持ちに駆られていた。だが、そんなものは依頼内容を見たことで、吹き飛んでしまった。

今、私は空港に来ていた。

次の依頼が国外でのものだったからだ。

海外からオフアーが来るのは、特別珍しいことではない。が、少し新鮮な気持ちに為れるのには違いない。前回来た時と比べて、少し騒がしいような気がしたが、搭乗の時間までゆっくりとしていた。

だが

「覚悟しろ」

唐突だった。背後から聞こえてきた言葉は、まるでナイフの如き鋭さを以って、私に届いた。全身の肌があわ立つのが分かった。

おぞましいまでの存在力、とでもいうべきか。

一度聞けば、骨の髄にまで響き渡る、否、染み渡る声。

次いで、ねつとりと肌に絡みつくような禍々しい力を感じ取る。それは、自身との間にある決定的な差を本能的に悟らせた。

「まさか、こんなに早く嗅ぎつかれるとはな」

頬を伝う一筋の汗すら、気持悪く感じた。

恐らく、どこかで依頼のことを知った何らかの組織が、妨害のために放った刺客。真っ先に考えられるのは、正史編纂委員会だが、彼らがこのような者を放つとは思えない。

果たして、視線を向けると、一人の少年がいた。いや、アレを少年と言ってもいいのだろうか？

まず何よりも真っ先に目に付いたのは、その目。

あの年齢には似合わない、どこまでも鋭く、冷たい、無機質な目。そして、暴力的なまでに、見る相手を威圧する凶悪な目。

嫌でも目線が向ってしまう。

気がつけば、先ほどの声など、力など忘れて、ただ捕らわれていた。例えるのならば、蛇に魅入られたか蛙のような……………

フッ！！

そこまで、認識して、体内の呪力を活性化して、相手の呪力をレジストする。

危なかった。あのままだったら、堕ちていた。

「その目は……………なるほどただの子供と考えるにはいささか無理がありそうだ」

そのおかげで、少しではあるが、いつもの調子を纏うことが出来た。

騒がしかったのは、彼のせいだったようだ。彼とすれ違う度に、周りの人たちは顔を青くしていた。中には、気絶した人までいるようだ。彼から放たれる呪力にやられたのだろう。

その呪力にレジストし続けながら、相手を考察し続けた。この少年の両目は普通ではないようだ。

それは、その両目からあふれ出る呪力から明らかだ。そして、その効力に私が捕らわれそうになっていたことから。いや、実際は捕らわれていた。レジストできたのは、ほとんど奇跡みtainなものだ。日ごろの鍛錬が身を結んだ結果だ。だが、レジストし続けなければ、また先ほどの状態になる。とある事情から、ある程度魔術・呪詛に耐性があるはずの私が、こつも梃子搦ることになるとは。

普通、魔眼の類は、人間が持ちえるようなものではないはずなのだ。それこそ神のような存在でなければ。

それに、異常性は眼に限った話ではなく、この少年自体にも当てはまる。

正気に戻り、改めてその身に宿す呪力を意識する。総量だけでいえば、そこらの術者を軽く越えているだろう。だが、ほとんどが両腕と眼にまわされており、そのほかの部分は、一般人が保有する程度の呪力しか纏っていなかった。その偏りには、恐らく彼の使う術に関係があるはず。稀にそういう者がおり、総じて特殊な能力を有している。だが、彼ほど、呪力を偏らせている存在は見ることがない。逆に言えば、それだけ強力な力なのだろう。

そのことを隠しめせず、堂々とした態度でいる。よほど自信があるというわけだ。まるで、彼の存在のとき振る舞い。

こちら側の世界に属する者ならば知らぬ者などいない、世界に片手で数えるくらいしか存在しない、魔術師の頂点にして英雄、霸王にして魔王。

まさか、この少年も？

しかし、その考えは、私に流れる血がそれを否定した。

では、この少年は一体何者なのか。

魔眼を有し、膨大な呪力で周囲を脅かし、まるで王のように堂々と佇むこの少年は。

間違はなく、一般人ではないはずだ、これほどの力を有しているのだから。

もはや、私はこの少年が、どこかの組織の刺客だとは思っていない。彼は、誰かに使われるような存在ではない。

私はこの少年のことが異様に気になった。だから、探りを入れることにした。好奇心猫を殺す、というのがこの好奇心は私を殺すだろうか？

「正史編纂委員会の手の者といったところか？」

「違う」

やはりな。あそこは、色々と縛られている。そんなところに身をおくとは思えない。

「ではフリーランスの魔術師なのか？君ほどの者が？望めばどのような組織にも入れそうなものだが」

トップとしてな。いや、委員会でないだけで、既に何らかの組織の頂点に君臨している可能性もある。

だが、返答は予想外のものであった。

「お前の味方」

あまりにも予想外すぎて、思考が数秒停止してしまっただけだ。
私の味方だと？

そのことについて、思考を巡らす。

この少年は今回の私の依頼について、知っているはずだ。だから、私に接触してきたはず。この依頼が成功するにしろ、しないにしろ、この国の術士は迷惑をこうむるはず。そのはずなのに、何故そんな言葉が返ってきた？何故私を支持するような言葉を？
そこで、脳裏によぎった先ほどの言葉。

『覚悟しろ』

あれは、私の命を狙っているからその言葉だと思った。
だが、その解釈が違うのであれば？

考えてみれば、この少年は、相対してから一度も殺気を出してない。ただ威圧しているだけ。それだけでも十分脅威だが、やっていることは、それ以上でも、それ以下でもない。
それをするこの意味は？

そこで、もう一度先ほどの言葉がよぎる。

・・・そうか。あれは、この依頼をこなすに相応しい覚悟をしろという意味か。

そうであるならば、合点が行く。

今回の依頼対象は、いつもと違う。むしろ別次元に経っている。警戒しすぎても、尚足りないのだ。

この少年はそのことを、伝えたかったのだ。

私も分かっていたつもりだが、あくまでつもり。この少年にとって

は、ただのお遊びにしか見えなかったのだろう。今回は相手が相手なのだから。

そこでやっぱり気になる。

この少年は一体なんなのか。

何のために私にそう言うのか。

「君は一体……」

「ただの一般人」

最初は彼なりのジョークだと思った。しかし、目は本気であつた。

「なるほど、そういうことか。すまなかつたな、少年」

この場には、一般人としてきた。だからそういう風に扱わないと、殺す

彼はそう言いたいのだろう。それと同時に、自分の情報を一切言うつもりはないという意思表示。

言葉の意味を理解して、私はその場から去った。これ以上の問答は不要であり、これ以上踏み込むのは危険と踏んだのだ。少しばかり殺気が出ていたことから、明白。こんなところで死ぬのは意味がない。

「やれやれ、なんだか疲れが一気に押し寄せてきたな。しかし、私の阿呆め」

私としたことが、全く以つて無駄な問答をしてしまった。愚問であつたと言っても、過言ではない。

私はいつも言っていたではないか。

重要なのは、相手の正体ではなく、己の立たされている場であると彼の存在のインパクトは、想像以上に普段の私を取り払っていたようだ。先ほどの自分を思い出し恥じる。それはあたかも、ノートに描いた自分で考えたかつこいいキャラを、誰かに見られた時と同じくらいの恥辱だ。

重要なのは一点。

彼は私に覚悟しろと言い、威圧した。

それが何を意味するかまでは、分らない。分かることは、私は彼の手の平の上で踊らされることになる、ということだ。

「だが、関係ない。やることは同じなのだから」

そうすることで、彼がどのような利益を得るのか、そんなことは私にとってどうでもいいことなのだ。

依頼を完遂する。それだけのこと。

ようやく、いつもの自分が戻ってきた。

が、それでも先ほどの恥は忘れられない。

気分転換も含めて、依頼を改めて確認することにした。

・・・・・・少し早まったかなとは思った。

私はどのような依頼でも引き受ける。

そして、絶対に撤回しない。

それが自分で定めたルールの一つだからだ。

ルールを定めるのに、特別な理由があるわけではない。いうなれば

私の拘りみたいなものだ。自分をルールで縛ることは、人生を豊かにする秘訣だと私は思っている。

ゲームという縛りプレイみたいなものだ。

今回もそうだ。

「魔王の一人を暗殺、か。こんな依頼をするのは一体どんな馬鹿だろうか」

そして、それを引き受ける私も相当な馬鹿なのだろうな。

人間誰しもが持つ根源的な恐怖 裏 *グロ注意（後書き）

感想、批判、大歓迎。

キングクリムゾンッ！！過程は消し飛び、結果だけが残るっ！！（前書き）

頑張ってみた。

がダメ・・・・・・・・ッ！！

この程度・・・・・・・・ッ！この程度のクオリティ・・・・・・・・ッ！

それで満足・・・・・・・・ッ！！満足してしまった・・・・・・・・ッ！！

と恒例の予防線を張ったところでどうぞ。

一部時間が飛びますので、注意。

キングクリームソング！！過程は消し飛び、結果だけが残るっ！！

乗り込むだけなら怖くないと自分に言い聞かせ、恐る恐る乗り込んだ後は、流れているアナウンスに従い、シートベルトをして座る。俺のチケットに指定されていた席は両親と草薙家から離れた場所であつた。

つまり、ぼっち。

……何、たまにはこういうこともあるさ。

一緒にチケットを買ったはずなのに、何故か席が離れているなんて別段珍しいことでもないのである。珍しくないったら、ないのである。クスン。

父さんが交代しようか、と申し出てくれたが、俺はそれを断つた。というのも、通路を挟んではいるが父さんの席が草薙家の丁度隣だったのだ。

もしここで頷いてしまえば、あの二人のことだ、変な気を利かせて俺と護堂くんを隣にしようとするだろう。そして、あの一朗さんも空気を読むに違いない。

だが、友達がほしいと考えている俺であっても、それは好ましいものではなかった。

少なくとも今は。

何故ならば先ほど俺は失態を犯したばかりであり、いくらあの一朗さんのお孫さんであろうと、あの脅えようから確実にトラウマになつてしまつたに違いない。

もし俺の隣に座れば……どう考えても悪い方向に事態は進まずだ。

だから、もう一度接触するなら、少しでも時間を置くべきだと判断

した。

友達になりたい子に怖がられるのは、心を抉られるものだから・・・

そして、何よりも

「クツ、ククク・・・」

気がふれたわけじゃないよ？

お腹の当たりからこみ上げている何か酸っぱいものをだね、おえっ、耐え忍んでいたら何故か代わりに笑いがこみ上げてきたというね、くぶっ、自分でも意味の分からないことに為っているんだ、うつぶ

何だろうね、ホント。

何がどうしてこんな中二つくな笑いをしているんだろうね、ホント。

とつくに卒業したはずなのにね、ホント。

自分でもびっくりだわ、ホント。

現実にククツって笑う人いたんだね、ホント。

あ、自分じゃん、マジか絶望したわ、ホント。

さて、自分は『ホント』を何回使ったでしょうかと訊く余裕もないよ、ホント。

こんな姿は情けないわ、恥かしいわで見せられぬのです。

唯一、吐いてないことだけが不幸中の幸い。

てか、飛ぶ前なのに、こんな状態で大丈夫か、俺？

なんやかんやで、覚悟を決められないまま飛行機に乗り込んだから、緊張でぶっ倒れそうなんだけど？胃とか心臓とかがやばい。ああ、

・・・・・・・・・・タロちゃん

「タロちゃん、降りるわよ」

「？」

・・・・・・・・・・はて、これは一体どういうことだろうか？

さつき動き出したはずの飛行機が、止まっていた。

止まる兆候など一切なかったというのに。

まるで止まる瞬間だけ切り取られたかのように、飛行機は止まっていた。

先ほどまで羽織っていなかった毛布を握り締め、混乱の極みに達した。

何が起きたか分からない。

いくら考えても分からないので、いつの間にか通路に立っていた母さんに聞いてみた。

「母さん、どうして飛行機が止まってるのさ。動き出したばかりだったじゃん」

「あら、よっぽど寝つきが良かったのね。飛行機が飛んだことにも気が付かなかつたなんて」

「そうみたいだね。タロ、ここはもう目的地だよ」

父さんの言葉に、呆気に取られた。

そんな馬鹿な。

一瞬たりとも寝た覚えなどないし、意識ははっきりとしていた。寝ていたなんてことは、ありえない。まさか、また二人で共謀して俺を嵌めようとしている？ いや、周りの人たちが次々席を立つ状況を見る限り、本当に目的地についていたようだ。まさか、二人も周りを巻き込むなんてことをするわけないだろう。

じゃあ、一体何が起こっているんだ？

まるで、過程が吹き飛ばされ結果だけが残ったこの状況は何だ？

まさか、この世界は黄金の精神を持つ人たちがいる世界だったのか！あの時神（？）が最後に言っていた（様な気がする）言葉は、そういうことか！！

なんて、ないわー。あははは、まじで何が起こったの？

「どうしたのかしら、タロちゃん」

「多分、寝つきが良すぎて、記憶が混乱してるんじゃないか。本人的には某スタンドの攻撃を受けた気分なんだと思う」

「あれだけぐつぐつと寝てたらそうなるわよね。起こしても全く起きなかつたくらいだし。疲れが溜まってたのかしら？なんだか起きるのを拒絶しているようにも見えたけど・・・」

「何はともあれ、そろそろ降りないと、迷惑になるから行こうか。一朗さんたちも待たせているし」

混乱している間に、二人に連れられた。

ゲートから荷物を受け取る場所へ、二人に銀色の宇宙人の如く手を引かれて行くと、既に一朗さんと護堂君が待機していた。なんていうことだ。俺は二人をお待たせしてしまったようだった。俺如きがお二人を待たせてしまうなんてっ！

「お待たせしました。この子を起こすのに時間が掛かりまして」

「いや、構わないよ。荷物はまだ出てきてないしね。別に急ぐ旅じゃないんだ。ゆっくり羽を伸ばそうじゃないか」

そんなやり取りを傍目に、俺は現状を既に把握していた。

実に情けなくて、嘆かわしいのだが、どうやら急に飛行機が動き出したせいで、俺は気絶してしまったのだ。おかげで、高所恐怖症の脅威に脅えずに済んだので、良かったとは思うが、何故だろう、もやもやする。ん？

視線を感じたので、そちらを見ると、一朗さんの後ろからそつと顔を出した護堂君がこちらを睨みつけるように、ていうか睨んでいた。視線が合った瞬間、引っ込んでしまったが。はあ、やっぱり怖いんだろつな、この目。

ちよつと憂鬱な気分に戻っていたら、思いっきり背をどつかれた。素直に痛い。

「そんな辛気臭い顔しないの。せつかくの旅行なんだから、楽しまなきゃ損よ?」

「母さん……」

「旅行は始まったばかりだし、仲良くなるきっかけはまだあるわよ。ね?」

「……うん」

母さんは快活に笑う。

こまけえことあいんだよ。

そう言われた気がして、元気が出た。

本当にこの人たちの子供で良かった。心からそう思う。

前世でも、現世でも、これから、きつと俺は親に頭が上がらない。うっん、きつとじゃない、絶対に。

そつだよな。母さんの言うとおりだ。

心機一転っ!!

俺は、その場で大きく息を吸って吐いた。余裕が出来たおかげで、

自然と周りに目が向いた。

ここは中国。

世界一の人口を誇る国。

その程度のことしか俺は知らない。興味なんてなかったから。でも、日本とは違う景色を目の当たりにして、行きかう人々を目にして。

段々、不思議な高揚感に包まれていった。

ああ。これが旅行ってやつか。

あまりにも新鮮だったので、もう一度空気を肺に取り入れることにした。

取り入れて、取り入れて、取り入れて……ん？

「ごほがへげほっ」

ちょっとありえないものを見たという驚きで、むせてしまった。

「もう、何やってるのかしら、この子は」

母さんが呆れながらも、背中をさすってくれた。

だが、俺はそれどころではなかった。

だって、父さんと一朗さんが男の人と話していたから。

それだけならいい。でもその男の人には見覚えがあった。

そいつは、黒のコートに黒の紳士帽を被ったあの男は、俺が日本を発つ前に会った、あの頭の中が思春期のままの、自称魔術師さんだった！！

なんでやねん。

「ああ、あの人？タロちゃんの隣の席に座っていた人なんだけど、覚えてない？」

なんでや・・・え？

S i d e 自称魔術師

私は、その姿を見て驚いた。

飛び上がるほど驚くという言葉を、自身で体感した瞬間だ。驚きのあまり、口の中がカラカラに乾いた。

「何故、ここに？」

率直に私は聞いた。

指定されている席、その隣に彼はいた。

先ほどと変わらずに膨大な呪力を纏い、泰然自若とした態度で座っていた。

魔眼の少年だ。

「クククツ・・・・・・・・」

呆然と立ち尽くしていた私を他所に、まるで悪戯が成功した子供のように、愉快そうに笑っていた。最初の邂逅と違い、圧される感覚もさほどないのは、目が閉じられているからか。だが、何故だろう、それでも彼に対して身構えてしまうのは？

「あの、すみません。ほつ他のお客様のご迷惑になりますのでっ！」

「あ、ああすまない」

気の弱そうなスチュワーズに注意されたため、仕方なく席に着いた。

そのおかげで、少し落ち着きを取り戻す。

「それで、君がどうしてここにいるんだ？」

偶然という線はないだろう。

彼はこちらのことを、把握しているからだ。

空港でのやりとりでそれは分かっている。付いてくるといふことか？

「ククツ……クハハ……」

しかし、彼はこちらを見ずに、ただ笑うだけ。どうやら、質問に答える気はないようだった。

何がそんなに可笑しいのだろうか。

少し癪に障るが、それを押さえ込む。この程度で冷静さを失うようでは一流とは呼べない。ましてや、相手はその全貌も分かっていない魔眼の保持者に加えて、特殊な術の使い手。謎の多い相手とやるのは、割りに会わないことが多い。人目もある。

そこまで考えて、気付く。

またか。

「どうも、調子が狂っているようだ」

先刻自分を戒めたばかりだというのに、また愚問。

大事なのは、己の立たされている立場だ。それ以外は基本どうでもいい。

このスタンスは、私がこの世界に入ってから守ってきた、絶対的なものであった。

それはつまり、自分以外のことは考えないということ。ただ自分が良ければ、それでいい。

この場合、自分も良ければ、と言い換えても構わない。他のものがどうなったところで、私には関係のない話なのだ。

どこかの誰かの策略だとか、どこかの組織の陰謀なんて知ったことではない。

利用するなら、そうすればいい。

邪魔するのなら、そうすればいい。

排除しようとするのなら、そうすればいい。

そちらがしたいようにすればいい。

結局、私がやることは、変わらないのだから。

だというのに、彼に会ってから、その『どうでもいいこと』を、相手のことを気にするようになったのは、どういうわけか。

彼は私を利用しようとしていない。

彼は私を邪魔しようとしていない。

彼は私を排除しようとしていない。

常であれば、それだけで彼の事は思考から外せる。

……恐るべきは、彼の他を圧倒する存在感、ということだろう。

彼の一挙手一投足が気になる。彼のことを何も知らないから、知りたくなる。

そうして、疑問が疑問を呼び、疑念が疑念を生む。

だから、そんな愚問が口から飛び出てくる。

そうでなければいつも通り、対応できたはずだ。

少年は別。少年は、特別だから仕方がない。

そんな言い訳が、頭を占めそうになる。

この考えは、いけない。下手すれば弱点にも為り得る。

今一度、戒めないといけない。

しかし、なかなか払拭できない。

ふう、悩ましいな。

「む？」

随分と長い時間、思考の海に沈んでいたようだ。

気が付いたら、飛行機は動き出していた。

ふと、隣に視線を向けると。

「すぴ〜」

少年は寝ていた。

それも、変な寝息をたてて。

何か拍子抜けした。

こっちは、己のスタンスを見つめなおして、軽くジレンマに陥ったというのに、彼はそんなこと知ったことではないとばかりに、寝ていた。腹のそこからドロドロとしたものが湧き上がってくる。

「こちらの苦悩も知らないで、全く」

が、ため息とともにそれは霧散する。

こうして見ると、一見どこにでもいるただの少年でしかないのだね。

なんとなしに頬を突つつく。子供特有のぷにぷにした弾力が指先に返ってきた。

気持ちよかったので、突きまくる。

数分後、ふと我に返って、客観的に自分を振り返って思った。

乙女みたいだな……。って阿呆かつ私は！！

「とりあえず、風邪を引かないように、毛布でもかけておこう」

馬鹿げた考えを、首を振って追い出し、気持ちを切り替えた。

やっぱり調子が狂っているみたいだ。最近やたらとため息ばかりついている気がする。

深くは考えないことにして、本を取り出して、暇を潰すことにした。

しかしこのときの私は知らなかった。目的地に到着した時にまた調子が狂わされるような出来事に遭遇することを……………。

キングクリームソーンッ！！過程は消し飛び、結果だけが残るっ！！（後書き）

相手が気になって仕方がなくて、つつい行動にはでちゃうのに、
口には中々だせないのが作者の乙女像
だが、男だ。

魔術師は幸せを逃す（前書き）

再投稿という形で、修正しました。

あまりにも文がひどかったので。

でも、それほど変わってないよ！絶望（略）

相変わらずクオリティ（略）

恒例の予防線（略）

設定の捏造とかも入っているので苦手な人は注意。

またなるべく原作読みながら進めています、矛盾点や設定のミスがあれば

容赦なく指摘してください。

ご迷惑おかけしました><

魔術師は幸せを逃す

「おきろっ」

心地よいまどろみに浸っていた最中、可愛らしい声が聞こえたかと思うと、身体をゆすられる。

おかげで意識が現実へと戻ってきた。

だが、なんとなく起きる気にもならなかったので、もう一度寝るべく、身体をもぞもぞと動かして毛布を頭から被りなおす。

「あさだぞ、おきろってば。おきろおきろおきろおきろおきろ——ッ——」

しかし、それで諦めてくれるような輩ではなかったらしく、今度は毛布を剥ぎ取ろうと腕を伸ばしてきた。

これをとられたら、冷房のせいで肌寒いこの部屋の中では死活問題だ。

そうはさせまいと俺は抵抗する。相手も相手に毛布を掴んだままだ。これでは埒が明かない。

恐らく母親だろうけど、俺を起こそうとするのなら誰であろうと許さない。

「ひぐっ・・・お、おきろってば・・・」

声に湿っぽさが宿り始めた時点で俺はおきればよかったのだ。だが、あるうことが、俺は最大の過ちを犯す。

「うるせえ、黙れやこのクソボケカスが」

布団から顔を出した俺は目を細めて威圧した。こっいつ時は俺の目の威力に感謝する。

ただでさえ小学生に似つかわしくないこの鋭い双眸が更に鋭くなつて相手を睨むのだ。

当然怖さ倍增。

やくざも身包みおいて逃げ出すこと間違いなした。自分で言つて空しくなるがな……。

顔はぼやけてみえなかったが、これでまた寝れる。

さあ寝よう。

二度寝は至福。

幸せはすぐ近くにあったんだよ……アニキ……

俺は忘れていたのだ。

ここは自宅ではないことを。

いつもは母親が起こしにくるので、今の対応しても笑顔で引きずり出されるだけだった。だがここは自宅ではない。

もう一度言おう。

ここは自宅ではない。

何度でも言おう。

ここは自宅ではない。

寝起き頭で忘れていたそのツケが、数秒後すぐに来た。

「びえええええええええええええええええ！」

突然鳴り響く子供の泣き声。

それで俺は思い出した。

そして、理解した。

起こそうとしていたのは母さんじゃない。

護堂くんだったのだ！！

昨日は気丈にも涙をこぼさなかったあの護堂くんが、泣いていた。

彼がいる経緯は、まず飛行機を降りた後にまで遡る。

日は既に没し、荷物を受け取ったら、今日はもうホテルでゆっくりするだけだった。

そんな折、向こうで自称魔術師と話しこんでいた父さんが言った。

「というわけで、こちらの神崎さんも同行することになったから。本人も了承したし」

「そんな話をした覚えぐあつ」

「ああつ、すみません。手が滑りました」

一体何が『というわけ』なのか。それと、自称魔術師は神崎さんっていうんだね。

これからはそう呼ぼう。心の中では自称魔術師と呼ぶけど。

しかし、父よ。今一瞬、肘が自称魔術師のわき腹を抉ったように見えたのだが？

某兎探偵ばりに疑いの眼差しを発動させた。

父さんは気付いているのかいないのか、話を進める。

「ホテルの予約もし忘れたらしいんだ。だから、僕らに便乗させて、楽に部屋を取ろうって寸法さ。ナイスアイデアだろう？」

「いや、そうでもないと思うのだぬうんっ」

「ああつ、すみません。大丈夫ですか？」

他ならぬ本人に言われてるけど、大丈夫か？

そして、父よ。今一瞬、足が自称魔術師の足の甲を踏み似たように見えたのだが？

某兎探偵張りに目つきを鋭くした。

父さんは気付いているのかいないのか、話を進める。

「っと、なんか勝手に決めちゃっていましたが、いいですかね、一朗さん」

「僕は構わないよ。本人が了承したのならね」

「じゃあ、決定！丁度荷物も出てきたし、もらってホテルに向おうか」

とりあえず、色々と突っ込みどころがあるのは分かった。じゃあつて、相手明らかに不服そうじゃねえか。明らかにありがた迷惑だよ。本当に了承受けたのかよ？

当事者である自称魔術師を見ると、こちらを見ていた。何かを訴えている視線だ。

しかし、相手が悪かった。圧倒的対人経験不足の俺にアイコンタクトは通じない。

なので、下手なことは口にせず、適当に頷くだけに留めといた。

すると、神崎さんが諦めたようにため息をついた。

何も考えていなかったことがばれたか？

心なしか、顔がゲソツとしている。

きつと、今ので幸せとか大事なものが逃げたに違いない。くわばらくわばら。

そんな経緯で、自称魔術師こと、少しの間同行することと相成ったのである。

どつとはらい。

S i d e 自称魔術師↓神崎

飛行機から降りた時、見知らぬ男が話しかけてきた。そして、離れた所で佇んでいる子供を指し、隣に座っていたかを聞いてきた。男が指したのは、あの少年だった。

話して特に不利な点はないので、正直に答えた。少年との関係が、気になったっていうのもある。

……スタンスについては、彼に関してはもう諦めた。例外が一つ、二つあった方が世の中楽しめるだろうと自分を無理矢理納得させて。

己を捻じ曲げるほど、気が付けば彼のことばかり考えていたのだ、認めざるを得ない。

私が、あの底知れない少年にイカれてしまったことを。

質問に答えると、男は敬語ではあるが、急に馴れ馴れしくなり、自分を少年の父親だと名乗った。名乗られたので、名乗り返したが、内心では嘘だと思っていた。

何故なら、男は明らかに一般人だからだ。

魔術師が生み出す神秘。

その根源は全て呪力だ。

基本的に人間は、無意識に呪力を溜め込んでいる。

魔術師は、その呪力がある程度身体に押しとどめて、無駄な消費を抑え、必要な時に必要な分だけ用いて神秘を行使する。ちなみに、呪力を溜め込める量というのは、個々で異なり、人によっては溜め込めない体質の人間もいる。

極端な話をすれば、呪力の流れで区別が付いてしまうのだ。

特に女性は、それによって老化を抑えることも出来るから、より顕

著だ。呪力が至純の域に達した老齡の魔女が、若さを保っているのは有名な話だ。

それを踏まえた上での、少年の場合。

彼には大きな偏りがあるものの、総量は、並みの魔術師と比べるべくもない。そして、それを完璧に押しとどめているのだから、将来が未恐ろしい。魔眼まで保持しているのだから、尚更。明らかに、神秘を知っている者の呪力の流れだ。

対して、この男はどうか。

垂れ流しだ。そこらを歩く他の有象無象となんら変わらない。

雰囲気も何もかもが、似ても似つかない。

何も知らない平和ボケした日本人そのもの。他の連れと思しき連中もそうだ。

そんな男が少年の父親だと？

だから、自然と目が細まる。

鳶が鷹を産むということわざがあるが、それにしても限度がありすぎる。

それに気が付いていないはずはないだろうに、相手はにこやかに笑顔を浮かべ、軽いノリで問う。

「タロに毛布をかけましたよね？」

「タロというのか、あの少年は」

「タロは愛称ですよ。太郎っていうのが、あの子の名前です」

少年にしては、平凡な名前だ。

いや、むしろ平凡すぎて誰もつけないため、珍しいのか。それにしたって、似合わないと思うのは私だけだろうか。

「それで、あなたがタロにしたことですが」

男は、私をじつと見て、話を戻す。

余計なお世話だったとでも言いたいのか？

まあ、そうかもしれないな。

この男も、あの少年の異常性を身近に感じているのだ。彼には必要がなかったといたいのだろう。

しかし、続く言葉は予想とは全く違うものだった。

「ありがとうございます」

そういうと、頭を下げた。

何故だ？

疑問が顔に出ていたのだろう、男は答えた。

「タロは、優しい子です。でも、あの目があの子を人から遠ざける」

言っている意味が理解できなかった。

優しいだと？この世の負を凝縮し、煮詰めたような闇を浮かべる目を持つ少年が？

「僕と妻は慣れているというか、あの目をあまり怖いと思わないんですけどね。でも皆言うんですよ。あの子のあれは悪鬼のものだと人間がするようなものじゃないって。」

僕達が何を言っても聞く耳持たず。あの子に恐怖し、嫌悪する」

それはそうだ。

少年の目は、普通じゃないのだから。

いや、目に限った話じゃない。

少年の持つ呪力も、少年の瞳に浮かぶ聡明さも、そう。

それだけではない。

少年の持つ一番の異常性は、少年でありながら、少年らしからぬ雰
囲気だ。

禍々しい呪力の波動が、無駄をそぎ落としたかのような顔の造形（
魔眼を除く）と相まって、もはや存在そのものが暴力的であるのだ。

だからこそ、意味が理解できない。

「タロはその度に悲しそうにします。中々、表情に出ないんです
けどね。聡明なあの子はもう、諦めてるんですよ。友達を作るこ
とも、誰かに優しくされることも」

男の表情は、親が子を想うそれで、
本当に大切に想っているもので。

本当に少年の親だと感じさるものだった。

だからこそ、意味が理解できない。

それはまるで。

「だけど、あなたはあの子に毛布をかけてくれた。それだけで、あ
なたに頭を下げる理由になります。あの子の親としてね」

あの少年がただの子供と言っているみたいではないか。

「どうかしましたか？」

「いや、すまない。いきなり頭を下げられて、驚いただけだ」

私の返答に安堵の息をつく男を横目に、冷静になるべく大きく息を
つく。

そうして今一度、私は少年を思い浮かべた。
男が何か話しているようだが、全て聞き流す。適当に相槌を打ちながら。

少年がただの子供であるはずはない。

もしそうならば、呪力云々もそうだが、空港での出来事や、今の状況に説明が付かなくなるのだ。少年は私の依頼を知っているからこそ、私に接触してきたはず。

あれを偶然と切って捨てるには、少々無理がある。

では男は嘘をついているのか？

いや、そうは見えない。

少なくともこいつは、心から自分を親だと信じ込んでいる。

これが演技なら、私の手には負えない。

暗示系の術に掛かっているのかとも思ったが、それらは総じて難しいという。

少年なら造作もないかもしれないが、こういった術は本物の記憶と偽りの記憶とのズレによって、魔術師でさえも精神にどこか異常が見られるのだ。

下手すれば廃人コースまっしぐらである。

一般人であるなら尚更だろう。

それがないということは、その可能性は限りなく低い。

裏を知る少年に、一般人である両親。

考えれば考えるほど泥沼にはまる感覚。

めちゃくちゃに絡みついた糸を解けないじれったい焦燥感。

少年は一体どこで、魔術の世界を知ったのだろうか？

必然的にそんな疑問が持ち上がる。

まさか、最初から知っていたというのだろうか？
ありえない。

生まれた時から、魔術のことを知る赤子がいたいどこに……
・いや、待て。
ぐるぐると渦巻く思考の羅列は、遂に一つの心当たりを掘り起こした。

『神祖』

随分昔に一度だけ資料で見ただけだから、大雑把なことしか覚えてはいないが、確かあれば、神が人間としての肉体を得た存在だったはずだ。

思い出した特徴とも合致している。

神には及ばないものの人を超えた力を行使する者達。
そして、人とは思えない気配を持つ存在。

少年が神祖であるのならば、ただものであるはずがない。
神から人へと身を落とした理由までは、神ならぬ身では分かるはずはないが、誇り高き神がそこまでしたからには、尋常でない何かがあったに違いない。

しかし、神祖でこれでは、暗殺対象のカンピオーネは一体どれほどなのか。

未だ見たことのない絶対強者相手に、私は普段通りの仕事を執行できるのか。

……全ては相対したその時にわかること、今は気にしても仕方がない。

命を賭けて挑むくらいでは足りないただけ、考えておこう。

「というわけで、こちらの神崎さんも同行することになったから。本人も了承したし」

どれくらい自分の思考に没頭していたのだろうか。

ハッとした時には、何故か彼らに同行するという話にまでなっていた。

どうすれば、『そうか、私もだ』と『いや・・・』だけでそんな話になるのか。

普通は話を聞いていないことに呆れて、会話が途切れ、縁も途切れるはずだろう。

真逆の結果に為るのはどう考えてもおかしい。

私は了承した覚えのない事柄に、慌てて否定しようとして、男の妨害が入り出来なかった。

図ったかのようなタイミングだった。明らかに故意だ。

それは、完全にペースを握られているということでもあった。

その時、少年と目があった。

子供とは思えない、人を容易く殺す殺人鬼、この世に絶望を蔓延らせんとする悪鬼羅刹、はたまた、獲物を捕らえて逃がさない蛇を彷彿させる目。

今は抑えているのか、初めて会った時ほどのプレッシャーはなく、普通に押し殺せるレベルだ。それでもあの目に見つめられると気圧されるのは、魔眼が魔眼である所以だろう。有無を言わさない力が、そこにはあった。

（同行せねばならないのか？）

そう目で問えば、少年は意味深げに頷いた。どうやら、少年の差し金だったようだ。

一体何のつもりだ。私には仕事が……いや、この状況に陥った私の失態だ。

その時点で拒否権などあるはずがない。

「はぁ……」

最近なにやため息ばかりついているような気がする。

よくため息をつくとき幸せが逃げるといって、私の幸せは一体どれほど逃げていつているのだろうか。

だが、正直なところを言えば、この申し出はありがたい。もう少し、少年を見ていたいと思ったところだったから。

よく見ないと分からないが、少年はどことなく悪戯っぽい笑みを浮かべていた。

何を考えているのか分からないくせして、そういう顔もできるんだな、と新たな発見に心が踊る。

私にここまで関心を抱かせるのは、少年だけだろう。

ならば、折角の機会だ。

少しばかりの休息を得たと思い、じっくり少年を観察することにする。

最後の仕事なんだ、ゆっくりやっても罰は当たるまい。

魔術師は幸せを逃す（後書き）

おまけ：自称魔術師と太郎父の会話 強引にgoing編

（縛り内容：片方『いや・・・』と『そうか、私もだ』で押し通す）

「ところで、ここへは仕事で？」

「いや・・・」

「もしかして、旅行ですか？奇遇ですね、僕たちもなんですよ」

「そうか、私もだ」

「ちなみに、僕達は明日廬山へ向うんです」

「そうか、私もだ」

「本当ですか？あ、じゃあよかつたら明日一緒に廻りませんか？つて少し馴れ馴れしいですよね・・・」

「いや・・・」

「え、そうでもないですか？了承ってことですか！では早速、みんなを紹介しますね」

「そうか、私もだ」

「ははは、当たり前じゃないですか。神崎さんを紹介しないはずないですよ。つと、そういうえばホテルはどこに？」

「いや・・・」

「え？もしかして予約を取っていないんですか？あはは、意外にドジっ子なんですねぇ」

「いや・・・」

「冗談ですよ。でしたら、僕たちのホテルに行きましょう。もしかしたら便乗できるかもしれませんよ？」

「いや・・・」

「気にしなくても大丈夫ですつて。それに、困った時はお互い様つて、習いましたからね」

「そうか、私もだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4485r/>

ガンナー（笑）は神と踊る

2011年10月7日01時18分発行